

報告番号	※甲	第	号
------	----	---	---

主 論 文 の 要 旨

論文題目 情報社会における自己変革の可能性を求めて
 ——情報学的源泉としてのベンヤミン——

氏 名 大澤 健司

論 文 内 容 の 要 旨

本論文の根底には、自己を変革していくとはどのような運動なのか、という関心が存在する。この運動を適切に表現しているのは、過去に学ぶ、という良く耳にするフレーズであろう。つまり、現在から過去を向いて未来を築いていく、ということだ。そして現在すなわち情報の時代は、この運動を問うのに適切な時代であると考えられる。なぜなら、過去の痕跡がデータという形で、それも一部の人々の特別な痕跡（例えば芸術家の作品など）だけではなく、皆の日常的な痕跡（例えば SNS への書き込みなど）が残されるようになったからだ。加えて情報学の核には、何かと何かを接続することによって豊かさを築いていくという理念があるように思われるからだ。その接続の一つに過去と現在の接続を見ることは、情報学において一つの進むべき道を示すのではないだろうか。このような関心を提示することによって、本論文の全体像が明確化されたと言えよう。

本論文は情報を焦点の一つに定めているが、情報を技術的に捉えるというよりは、むしろ哲学的に捉えていく。この点にこそ、本論文の特徴がある。では、情報学における哲学的な思索が担う役割とは何か。本論文では次の二点を担う。一点目は、情報を捉えなおすということである。例えば、情報を介して我々は世界や人々とどのように関係しているのかという点から、情報を考察する。二点目は、新たな時代を牽引するイメージを提示するという点である。それも、表面的な現象にのみ注目して幻想的なイメージを提示するのではなく、対象の根底にあるものを捉えた上で、建設的な形で批判的に提示するのだ。このように提示された新たなイメージを軸に、もしくはそのイメージを分散させることで、時代を変革していく運動を様々に生み出すことが、二点目の役割の中心に位置する。

上述のような役割を担うものとしての本論文が主として依拠するのが、ドイツの哲学者であるヴァルター・ベンヤミン（1892-1940）の残した思考断片である。彼は様々な対象についての論考を残しているが、その中でも経験や体験の問題について述べられているいくつかの中に、情報に関する箇所を見出すことができる。ベンヤ

ミンの情報論を発掘しそれを基礎とし、先に挙げた二点の役割を中心に、本論文は展開されていく。

本論文の目的を簡潔に述べるなら、見出されたベンヤミンの情報論に依拠して情報概念を考察し、時代を変革する一つのイメージを提示することである。そして最終的に提示されるイメージとは、現在の自己を刷新していくような運動を自己の痕跡（データ）とのコミュニケーションを通して生み出していく、というものとなる。我々の時代において、情報技術の助けを借りて、様々な存在同士が接続していると言えよう。例えば、自己と事物、もしくは自己と他者などといった組み合わせを挙げることができる。接続を通して新たな視角や運動が生じ、その結果として便利さや豊かさが生み出されている（当然、つながり過ぎることによって、その反対の側面も生み出されてしまっていることに注意する必要があるだろう）。例えば、他者や新たな文化と出会うことは、自己の内に新たな要素を招き入れることを意味し、自己を変革していく起点とも言えよう。しかしここで忘れてはならないのが、自己と自己との接続である。自らの現在を形成していない要素である他者や新たな文化との出会いが自己を豊かにする運動の発端となるのであれば、自らの現在を形成していない自らの要素との出会いもまた、自己を豊かにする運動を引き起こすことができるのではないだろうか。自己に豊かさをもたらしてくれるものは、自己とは別のどこかに存在するだけではなく、自己の内にも存在する。情報技術のおかげで自己の様々な痕跡（データ）が残される中、自己の痕跡が持つ豊かさにも目を向けるべきである。そこには、現在の自己にとって他者的な諸要素が眠っているはずだ。自己との対話によって自己を豊かにするというこのようなイメージを提示することが、本論文の最終的な目的である。次に各章の内容をまとめていきたい。

第Ⅰ章で扱うのは、ベンヤミンが採用した方針と方法から導き出された、本論文の方針と方法である。その方針とは、過去と現在そして未来を豊かにするということである。そしてその方法とは、過去の実現されていない可能性と現在との出会いからイメージを浮かび上がらせ、そのイメージから現在を変革していくものと言える。方針と方法に共通する重要な点は、過去の実現されていない可能性に目を向けるということだ。ある時代や自己の主導的イメージは、過去の積み重ねによって構成されていると考えられる。しかし同時に、主導的イメージとはならなかった過去も存在するはずだ。現在を構成していないという意味で眠りにについている過去は、現在に対し、新たな視角や運動をもたらす。例えば、知の問題を考えてみたい。ある時代において眠っている知を現在において発掘することは、その知が持つ豊かさを活かし、次の時代を形成していく運動を始動させることを意味する。豊かさを持ったまま眠りにについている過去を活かすという態度がベンヤミンの要であり、そして本論文の要でもあると言える。

第Ⅱ章で扱うのは、ベンヤミンにおける情報論である。ベンヤミンは情報を技術的な側面から捉えるというよりは、むしろ人々や世界との関係の中で捉えようとした。いくつかの著作で論じられる経験や体験の問題という文脈に、彼の情報論を見出すことができる。彼の断片的な思索をつなぎ合わせることで得られるこの情報論の核となるものは、次のようなものとも言えよう。それは、様々な刺激をもたらす不安を惹起する世界（一例として、交通の場面）に対し、情報によって得られる事柄（世界との対応関係にある痕跡とも言えよう）を用いて、人々は理解可能で安定的な領域を構築していこうとするということだ。対処する術を知らない事柄や未だ理解

していない事柄は、人々に不安を与える。その不安を解消するため、情報は世界に対するある種の答えを伝達してくれる。別に言えば、情報は未だ理解していない世界を縮減することに寄与するのだ。このようにして、四方八方から与えられる刺激に的確に対処でき、世界の不安を解消してくれる情報が価値を持つことになる。

第Ⅲ章で扱うのは、ベンヤミンにおける情報論の限界と可能性である。情報はベンヤミンの時代においても、そして現在においても主導的であると言えよう。しかし情報は、どのような意味で主導的なのか。情報が主導的であるとは、我々がどのような世界に生きていることを意味するのか。これらの問いに答えるために用いられるのが探偵小説である。なぜなら、ジークフリート・クラカウアーが『探偵小説』において示唆しているように、探偵小説は時代を極端な形で映す鏡、いわば変換器として機能するからだ。そして探偵小説を通して取り出されたもののうち、次の点が重要と言えよう。それは、探偵がもたらす唯一の解は、探偵が扱えないものを排除することによって成り立つものでしかないということだ。探偵が扱えないもの、つまり痕跡として残されないものは、例えば犯人の動機である。これは、情報において重視される世界との対応関係に、裂け目が生じる事態を明かしている。探偵はこの裂け目を巧妙に隠しつつ痕跡を組み合わせ、過去の事件を現在にあたかも再現するかのよう謎を解く。探偵小説によって、我々は痕跡の扱い方の一つの解を得るのだが、しかしその方法を用いることができるのは探偵のみである、ということが結論付けられる。

第Ⅳ章で扱うのは、自らの過去の痕跡を用いて自らの現在を変革していく運動というイメージである。現在、情報技術を用いることで、我々の日々の痕跡がデータとして数限りなく残されていく。しかしこの痕跡を探偵小説的に用いるのであれば、それは過去を現在に再現することにとどまってしまう、また、幻想的な行いと言えるだろう。なぜなら、全てが痕跡として残されるのではないため、痕跡に唯一の解を求めることなど幻想にすぎないからだ。むしろ我々は、過去の実現していない可能性を活かす形で痕跡と向き合うべきである。例えば、撮った日付も場所も異なった自身のいくつかの写真を自分で見返すことで、我々は実際にそうであった過去とは別の過去の組み合わせの可能性を辿ることができる。自身で書いた論文を見返す時、書いたその時には気づかなかった何かの可能性に気づくかもしれない。このように自身の痕跡と対話することは、自身の過去に根付いた、そうであったかもしれない過去との対話ともなる。この対話は、眠りについてた可能性を契機とし、自己を自己によって変革していくことを意味する。そしてこのような対話は、我々の時代においてこそ可能であると考えられる。なぜなら、眠りについてた可能性は痕跡から読み取られるものであり、先にも述べたように、SNSへの書き込みやふとしたスナップショット、検索ログや買い物履歴など、我々は常に何らかの痕跡を残し続けているといっても過言ではないからだ。

まだ知らない事柄は、確かに不安を与えるものでもある。しかしそこには、何らかの可能性も眠っているのだ。別のどこかではなく自分の内にも、可能性は眠っている。我々は現在の情報技術の助けを借りて、自身の痕跡をより豊かに活用することができるはずだ。我々が日々残し続ける膨大な量の痕跡＝データの活用方法のこのようなイメージを提案することは、情報学並びに我々の社会を変革する可能性を提示するものであると考える。